

桑のほぐれ芽、虫がしやくとつてゐる
 月夜の雲のほつかりほつかりと白い木蓮のはな
 梅の花に種俵干してあるこの家もこの家も
 青磁の鉢のふかさの匂ふネエブルを盛り
 ひそかなる思ひ白き花として
 とちの花いつまでもつゆぐもりかな
 雨はれでさむし小さい梨の實青葉の中
 山の色も土藏のとびらを閉ぢて春のゆるべ
 山へ魚賣りが來て行く春のさばの肌いろ
 ことしは采國旗に雨上つた五月の白雲の風景
 島と大きくかいてあつて豆の花ひとつそり
 酔うて戻つて酔ひぎめの梅の一二輪
 男の子でしたそらまめしつかりとれました
 星へ、眠れたらしくて枕べおいとまする
 海、くらしい雨が降る灯がともる
 菜の花に降るあめが港の船に降るあめ
 そよ風そら豆の花のやうな蝶々で波の音
 枯れきつて秋田に通ふ道はるかに、とその通り
 雪のきた鳥海山の端正、窓は晴れてコンパスをとる
 からかさほせば日のさす白いいちはつ
 夜目にもそれと種俵漬けてあるのが水音
 そよぐほどな麥となつてそよぐ
 背戸は瀬音のそちらにも梅
 野を焼くと空がすつかり春月が出てゐる
 しひの木ばやしの葉をわたる風の太陽はる

横關碧樓

遠藤源治

増村辰郎

小西佛舍利

岡浩二

三好米子

金平二火

小島胡市

浅井冬二

内久根聖巳

佐藤逸仙子

森田十雨

高橋政二

佐藤惠子

× 「萬温泉を中心として數里、四方はブナの原生、天下無双の美林、下生えは放牧の牛馬にくはれて、數町の外まで見透さる、巨幹柱となり、青葉天井となりて、實に自然の一大殿堂なり
 風清し一川通るぶな林
 大正十一年八月十九日
 六町桂月記之」
 道端の軒下に打ちつけてある板ぎれに書いてあるのは、たしかに桂月の肉筆である。それを讀んで、その指標のある小徑を沼まで行つてみた。沼は萬沼といふ。周圍二キロもあらうか、沼をめくつて少し高みの穴を開いて、遊歩道が出來てゐるものよろしい。
 × (六月六日)
 雨の音かと思つたのは、水の音。ひろびろとした浴槽には朝日のおふれる音、とも云へよう。こゝの便所は自然の水洗式で氣持がいい。
 × 萬温泉から猿倉温泉まで二里。けふは入甲田越えの山道なので、山杖をもつ要がある。青丘と石路とが長い檜の杖を三本作つ

川向うの櫻がなくなり櫻が青みがかつて來る橋
 なにか新規に蒔いたうねと菜の花咲いたうねと平和になり
 お嫁に來たところでも富士が見え嫁さん麥に土かけをする
 通つてきた青麥をもう一度見て通る土手を通る
 一晚に咲いた花の着ものがぬいであるその裏
 急に咲いた花の畑からもどり坐つてゐる
 おみくぢがら花のやうにくくつた枝で白い蝶々
 風が芽ぶく庭石の月夜となる
 春の嵐が夜明けて風いで松林の中の一軒
 かにが石をまたいでゐる水の中に萌えとる
 月夜から櫻のひらひらする池の中の道
 朝は岩木に朝日の家の芋の花かな
 どの木も重い葉のをそい月の光となつてゐる
 青麥わたる風の病人へ羽織着せると
 戀といふとも病む身の葦がひそかに芽を持つてゐる
 雲、杏の花、丘をこえると療院がある
 梅の枝を挿して疎開兒童のゐる墨を磨り
 山から雨が桃畑の桃の花をぬらしゆくにて
 白い雲にタンクのある家など海へバス待つところ
 結核菌の赤さ研究室のそと武藏野は麥のみどり風ふく
 何でも一山拾圓のトランプのやうなおさつのびらびらと春
 食ふための芹摘んでゐる教へ子が通る
 雨のあがると夕日の照り桐の花この道
 ごつとりごつとり水車にも冬日の照つてくる山の中
 呼べば子どもたちのつららかちつてゐる其子等の中

吉澤稻市

村田白鶴

岡田琅玕

芝田青萌

瀧山重三

柄本よし雄

遠藤虹水

南川鴻亮

長山林二

てきた。桂月の墓の丘から切つたといふ。
 をのく其をついて出かけた。奥の細道に
 一肩竟の若者、長脇差をよこたへ、櫛の
 杖を携へて、我々が先に立つて行く、け
 ふこそ必ず危きめにもあふべき日なれ
 と、からき思をなして、うしろについて
 行く

といふ場面も思ひ出されて、櫛の杖はもの
 くしい。道は割合によく、道端に芝
 の枯れたのなど、しぜんにモウセンを敷い
 たやう、それに休んだり、心のどかに上つ
 て行く。入甲田の主峰、大嶽が見えてくる
 頃から、道には雪が残つてゐる。だが、此
 の道の面白いことは、青葉がぞつくりと茂
 つて、その雪の上にまで垂れてゐること
 だ。——日本アルプスの白馬嶽にもかうい
 ふ風景がある——青葉と白雪と相接して對
 映してゐる美しさはすばらしい。

×

猿倉の温泉でひるにしようとして、立寄つ
 て見ると、此の春の雪崩の爲に、旅館は押
 しつぶされて、二階はそのまま立つてゐる
 が、階下は横合から突きくづされたやうに
 疊もふすまもメチャメチャになつてゐる。
 浴槽は家根ごとベチャンコになつてゐる。

藤の一枝は折りもちて微風をゆく
 山の残雪、鐵橋にかかると汽車がふえ吹き
 日が永いつつじの花の暮れるまで遊んでゐる聲
 菖蒲持つて来てお墓さめさめぬれてゐて
 長い汽笛でからまつばやし淋しいあめ
 汽車が深夜になる月になるあめのあとの月
 海の賑はふ話など畑から胡瓜買うてゐる
 月が圓覺寺の杉を離れると栗の花月夜
 片側の山の月の光は栗の花あふれるほどな
 湖の春へひぎをだいとる
 單衣の柄のはつきりと女のたつ湖を前
 ふりやんのだ石のお月夜
 何と雲一つない名月で燒跡の煙突
 簡易住宅そろつて出来てゆくあさあさ霜どけ
 富士にわく雲の富士にかけおいて晴れてゐる冬
 降りぬいた田の暑くなる朝の牛が歩いてゆくしりこぶた
 寒さも彼岸過ぎの果樹園の裏を通つてゐる道
 御隠居さんはおひとり住居の蔭の花あたたかい
 多日落してしまつた浪の岩のあたまたま
 春の日乳房のすばらしい汐汲んでゐる
 山には雪のある豆の粒々を落してゆく
 そらのどこかに雲雀の聲がある萱場開墾
 ちらちらちつてさくら沼から釣る鮎の金色なす
 川原湯には子どもがゐるすかんぼはきものそぼ
 岩魚のつれぬ日の雪どけ水のつめたさをいふ

大竹大三

白井正夫

里井正子

駕見冬青

小林雪後

上野忠三

植田市籠

木村丁字

皆川蓼二

勿論、人はゐない。旅館の持主は、まだ里
 から上つて來ないのだ——來て見たらび
 ツクリするだらう——だが、温泉は草原の
 中に露天風呂が二ヶ所あつて、そこは無事
 だ。手をさし入れてみると、一ヶ所は熱す
 ぎるが、一ヶ所ははいれさうだ。で、そこ
 に靴と服とを脱いで、一浴する。雪をいた
 いた大嶽がそそり立ち、からだを沈めた
 後の湯がしづまると、目の前までその雪の
 投影がのびてくる。かつこうが鳴く。うぐ
 ひすが鳴く。あゝ好い湯加減ではある。

猿倉の湯から鹿湯（酸か湯とも書く）ま
 で二里。此の道もさしたる上りではないけ
 れども、雪が多く、その雪がすべるので少
 々難儀だ。樫の杖をもつてきて大に助かつ
 た。今朝から、此の山道に一人の人にも逢
 はない。まだ雪のある今ころ、通る人なぞ
 は絶えて無いと見える。雪の上にある足跡
 は、兎であらう。兎の糞もおちてゐる。と
 きどき、かなり大きな獣の足跡もある、熊
 だらうかと思はれる。

峠近くなつて、雪の中にとど松の地帯が
 あり、又しらかばの地帯がある。水蓮沼と

麥がのびるこの日ごろ晝ごろしづかな

北田千秋子

しづけさしろきかべに向ひ學び春となり
みはるかすに風吹きわたる麥の出來かがやき
弟の心の中を知つてをり弟と芹をつみてゐ
簡易住宅を急ぐ音その外春はしづけし

平松星童

ひかりにつかれたやうなこどもをつれてみづらみのほとり
父も母も星になつたこどもふたありだきあふてねる
月夜何かかげろうのやうな望遠鏡のびたりちぢんだり
アルコーランプあをくボカボカつきよでござる
枝の中の枝が月の光

篠崎早男

耳がかゆいのであまい思出のやうな夜のマツチの頭
通るので蕨が一本のびてゐたので
吹いて吹きつづけて五月の麥笛です
雨音も傘に草が萌えとる
旅はところてんの味のやうな、たべる
月から吹く風のふねのふえ

木庭立夫

毎夜聞き今夜こがらしの復員だよりを聞く
がらがら錨あげて月の船になつて出てゆく
鳩の低くとびゆく影も柳の晝のしづかな(訪藤平氏)
雨が柳に少し風があつて柳河橋とあつて通る

田中操

雨にぬれたちしや摘んできて夕餉はまだ明るいうち
春、たけのこむかれてほそくなつとる
春晝船底いぶす火の白々と燃ゆる
雲が月をふくんでゐる麥畑波のごとし
雪の夕焼に車を引いて

いふ小さな池に、水蓮はまだ芽ぶかないが
池畔に水ばせうの花が「美し」といふよりも
「妖し」といふ感じ。せうぜうばかまとい
ふ葉をもたぬ高山植物の薄紅の花は「あは
れ」といふ感じ。

× 峠をおりると、地獄沼といふ、別府の坊
主地獄のやうな、うす墨色をした熱湯の池
があつて、どろどろの土が火鉢の上の餅の
やうにふくれたり凹んだりしてゐる。そこ
から二三丁行くと鹿湯だ。宿は一軒きりだ
が、此の宿がバカに大きい。今は田の忙し
い時で客は少いさうだが、千人も泊れると
いふ。多くは木賃制度で、自炊の出來る部
屋が百室あまりある。私達の室は第一號
室。小流があり、つゞじのさく山を前にし
て静かであるが、風呂までは廊下つた
ひに一町餘もあり、歸り道をまちがへて迷
ひ込んだりした。此の風呂が又大きくて、
所謂「千人風呂」を二つと、湯籠が一つ一
つ屋根の下にあるから、屋根のあることを
感せず、露天の感じだ。男湯も女湯もな
い。すべて、赤裸々、露堂々、大自然の一
枚の光の中。

(六月七日)

枯木のみちでこんなにも言はぬこともある彼

岡野宵火

顔に白いきれをよるがあさとなつてゐる
風の行方を、といつたほすすきで
夕明りの、しづかに生涯をへた顔で
タイピスト二人のあと私が下りて一階びしよびしよの雨
田打にゆくじかん學校にゆくじかん遅い桃の木一本
山のたかいたかい空まであるはたけと平野にある城櫻がさく
やし屋のやしのうれてゆきうれのこつてゐるやしのみ日のくれ(ボルネオにて)

加藤裸秋

砂から水がわいてゐる棘のある大樹遠雷してゐる
芭蕉に少し葉風がでてゐるやし酒うり
菜の花、サイレンが近くでなると遠くでもなる
床屋さん手のすいてゐるのに來て茶の花がいちりんざし

北田山口彦

梅の花のどこか日南でもと書物もつてゐる
驛前傘がいりみだれ賣店は本の中に灯してゐる春
富士山と浮き雲の白く麥の手入すこしさむく
子供の起きてきた聲がもろ外でしてゐるこゑ
かべのばらいろの日がやがて消えてゐる冬
ともすれば泣けて來さうな白い足袋はく
花ぐもんのオールガイン

高崎貞之

ともして月夜の藏へさげてゆくともしび

名雪理輝

田植ざかりは早寢する月が物置の屋根
朝日が蒔いて麥の正しいかたち日なた日かげ
そらまめの花にくろい目があつて咲いてゐるはたけ
遺骨白くまぶしく首に吊つてもらふ箱の軽く
菜の花や佛のこと語ればなぐさめられる日はしづみ

鹿湯から萱野まで二里半。これは下りの
道だし、もう雪はないので、らくである。

で、今日は句を拾ふやうな氣持で、きのふ
の櫛の杖はノンキに手に提げて行く。八甲
田の主峯はうしろになつて、岩木山が左手
にあらはれる。前面に青森灣か紺青色に
見えでくる。青森市の戦災の跡に建つた家
が木の色新しく見えてくる。このまゝ青森
まで徒歩で行くとしても六里。日の高いう
ちにははいれるのだが、萱野の茶屋で、青
森から來て歸るトラックがあつたので、そ
れに便乗を頼んだ。高く積んだ荷の上に乗
つて、疾走するので、少々あぶなくはある
が、展望はくわつたつ、何のさへぎる物も
なく、青々とした丘陵の起伏する津輕平野
を眼下にして、大きな象にまたがり、これ
に鞭うつて走らせるやうな、ゆくわい極り
なし。

青森市内はいかにもキレイさつぱりと焼
けてゐた。汽車の時間まで焼あとに出來た
何とか食堂で、そこで出來るだけのもの
で、時間をたべた。大鰯に着いたのは夕
刻。不二屋に入る。こゝに夜雨、石雨來
つて、山の話は酒のサカナにして亦たの
し。

(六月八日)

ひとりごと

井 泉 水

層雲創刊以來、三十五年、層雲に入つて句を寄せてゐた人の總計を數へたならば、おそらく四五萬人はあるであらう。その人達の多數は今どうしてゐるか、どこへ行つてしまつたのか——近いところだけを見ても、二三年つゞいて大さう誌上にふるふ人がある、何かの事情で、二三號、句を出さないやうだと思つてゐるうちに、とうとう全く出さないやうになつて、姿を消してしまふ、かういふ人がかなり澤山ある。これは社として見ても、私として見ても、何かさびしいことだが、その當人自身にとつても、あまりにアツケナイことではないかと思ふ。

たとへば糸に物を通すにしても、後から後から通したものが、皆シリからぬけてしまふやうでは、いくら通しても致し方がない。糸のシリをしつかりと留めておくことが肝要である。いままでの層雲には、このシリが留めてなかつたのではないかと思はれる。層雲は一つの「道」だ。これは、交通往來としての「道」にたとへてもいい。この層雲街道をみんな歩いてゐる。脚の早い者はどんどん先へ行く、脚の弱い者はゆつくりと行く。好き道連れが出来て話しながら行くのも楽しい。だが、脚の強さが違ふと、「どうぞお先へ」と云ふことになる。先へ行つた人は、「調子づいて歩いて行くが、そのうちくたびれる時も来る、いままで脚に自信をもつてゐただけ

ガツカリする。それまでガンバリつゞけてゐただけ、一時に氣持がたるんでしまふ。それで、ヘツタリとなつてしまふらしく思はれる。

かういふ風では、層雲が層雲として大きくなることは出来ない。層雲創刊當時と、三十五年たつた今日と、同人の數は殆ど同じである。たゞ、顔ぶれが變つてゐるだけである。これでいふのだらうか。——これでもいふさといふ考もあらう。だが、こゝで其の譯合をじつくりと考へてみることもカンジンである。

層雲はかならずしも人數の多いことを理想としてゐるのではない。たゞ人數を多くしたいのならば、通俗大衆的にすればいふのだが、さういふことを目的として考へるのではない。然し、一つの藝道として、たしかに好き物であり、又、それを人にすゝめる方法が當を得てゐるならば、しぜんと生長してゆくべきものだ、しぜんと肥えてゆくべきものだ、それは生理である。この生理がジュンチョウに行はれてゐないとすると、そこに何か不健康なもの、又は何か無理なもの、又は何か不自然なこと、又は何か行き違つたことが存してゐるのではないかと、一おうは考へてみる方がホントウである。

再びタトへを出して見るならば、果樹や野菜のサイバイのことにして考へてもいい。桃の木に桃をならせるにしても、たゞ自然に花が咲いて好き實の生るものではない。てきとうに肥料をやつたり、枝ぶりのセンサイをしたりすることがカンジンである。又、品種の改良をしようと思へばツギキといふことをしなければならぬ。私達は、此の層雲といふ桃の木にそれだけの手がけをしてゐただけであらうか。なるほど、生つてゐる實に、フクロをかぶせたり、除蟲劑を

ふりかけたりする程度の手がけはしてゐる。だからこそ、毎年、一冊の「層雲句集」を出す位のシウカクはしてゐるのだが、上にも談したやうに、此の桃の木が木としては太つても行かないし、又、その品種も大體に於て、層雲風といふやうな味からヒヤクするところが少い——としたならば、こゝで、此の在來の栽培法といふものをもう一つ改善して行つた方がいゝのではないかと思ふ。トマトを作るにしても、むちやに肥料をやればいゝと云ふものでない、第一に其の土地の質を調べなければならぬ、日當りの良し悪しを見なければならぬ、支柱の作り方もないがしろには出來ない。要するにそれが充分に根を張つて、大きくなり得る條件を備へさせることが第一である。層雲といふトマトの木がいかに弱々しいといふ觀はないだらうか、少くとも、もつとたくましい木にしたいものではないか、それには、まづ此の木づくりをもつと上手に立てることを工夫した方がいゝのではないかと思ふ。

そこで、これに對するクフウ如何といふことになる、私には私としての腹案は出來てゐるが、それを話すより前に、諸君に於て、此の事をトツクリと考へてもらひたい。一度、考へておいてもらつた上で、おもむろに私の考を談したい。

で、私の考は、次號以下にだんだんと談さうと思ふから、こゝに早急に結論を云ふのではないが、早い談が、やはりタトへを以て云ふならば——こゝに「層雲の道」即ち「層雲街道」といふものがあるとしたらば、これは脚で歩くといふのが普通ではあるけれども、脚の強くない者や、少しくたびれた者は電車に乗つたといふではなないかと思ふ。尤も電車に乗りきりではいけないが、又、降りて歩

いたならばいゝのだ。つまり、此の街道に電車を通したならばどうかと思ふ。かつて、富士山にケエブルをかけようといふ案の出たことがある。日本のレイザンにケエブルをかけるなどは、山レイをけがすものだといふ反對説が出た、少くとも風景をハカイするといふ反對説も出た。だが、私はその反對説はキョウリョウな考だと思つた。大きなお山に一條のケエブルが敷かれたとて、風景に何のキズもつきはしない。ケエブルが出來たとて、脚で歩く登山行者はやはり脚で歩く。行者は行者としての信仰をもつてゐるからだ。又登山家の興味は一步々苦しんで登ることにあるからだ。だが、足弱の人達だとして、ゼツチヨウをきはめて山上の大觀を味ふことが出來ることになる。これは結構なことだ。そして高山の趣味が普及すれば、登山家も殖え、行者も亦殖えることになるのである。

もう一つタトへをもつて云ふならば——物の高さを高くしようとするには、煙突のやうに直線的に高くすることは難しい。たとへ出來ても倒れがちである。それならばどうすれば好いかといふに、それはピラミット形に積んでゆくべきものだ。ピラミットといふものは、頂上は尖つてゐてせまいけれども、底邊はどつしりと廣がつてゐる。底邊の大きくて廣いところに安定性スタビリティといふものがある。底邊が小さくて狭くて、丈ばかり高いものはひよろひよろとして不安定である。私達の俳句サアクルの組織といふものも、かういふ風に作つて行くのがいゝのではないか。皆が皆、上部組織になることは出來ない。中部組織あり、下部組織あり、それに支へられて、上部組織がしつかりと其の高さを保持することが出來るのだと思ふ。

明月壇

井泉 水選

澤木昭二

品川幸一郎

武田 桂

櫻田輝郎

少女と仔犬とこんな美しい湖の上の夕雲
 春の芽をもつた木が一木日がくれて二階にゐる
 窓、水のおもてが雨やんでゐる
 夕空は刈りとつたあとの草の芽
 風がふくと櫻咲いてをると門のそばの勝手口はいる
 夕空はこども初夏二匹の山羊をつれて歩く
 空が花さいてくる時計にねぢまいて振り
 みちの草笛になる草で海が夕焼けてゐる
 妻に客がゐるかへり梨の花ぢあめになつとる
 月夜の外へでてうちの小暗いらんぶ初夏
 ゆりびの橋のある風景まんちようです
 裏口の紫焼の土瓶に日がかげつて昏れてゐるけふ
 もう涙をふいてあの星知つてゐると言ふ
 いびつな世のまるい月が水のなかにある
 青い草のなか水が流れる朝を歩く
 女ばかりで田を植ゑてゐる遠い山の降つてゐる
 つまらない話でしたと月に咳をしてゐる
 知らない人ばかりの花の中花を見て行く

旅中消息

井泉 水

藏館温泉で、夜半目がさめて睡れず、時計を見つゝ、夜明の啼き聲をメモにかく。

三 時―河原の聲（夜中鳴通し）

三 時 半―鶏の聲。

三時四五分―時鳥鳴く、鶯鳴く。

四 時―雀鳴く（時鳥はさつぱりと

鳴きやみ、鶯はなほ時々）

四 時 半―鴉鳴く。鶏再び鳴く。

×

今日は弘前俳句大會の日。午前、弘前市貞昌寺にて、當地物故俳人追福供養、竹童、抱烈子、星陵、巨牙等二十五名の佛を出してゐるのだから、こゝの俳句會もかなり古い歴史をもつてゐるのだ。

拈香一句

えうらく藤の花さいて此の日廿五佛

×

郭公、其より女人の焼香もへたるなり

×

午後より、川善樓にて俳句大會と流矢老

讀みかけては伏せておく机の花の咲きかけては居る
 草に風ある人が夕 甲の方へ行く
 宵のくちにもうおちる月が芋の葉
 櫻散つてさくらのわかば學校音讀する
 搗きたての餅はこれは草の青さやはらかし
 庭に出たいろいろのくさであつてあめのあがり
 種 おろし て 去 ん だ 山 畑
 温泉だけは昔のままのこれは湯宿の雀のこゑ
 設計圖かいたり消したり焼跡のかぼちやの葉
 みごもつたほそいかほがねがほになつて
 夫婦で床のべてくれてしんに山の中ですといふ
 焼け朽ちた木芽ぶいた木藏の中に住んでゐる
 雲を出た月の光の焼けのこつてゐる藏の白く
 紅く咲いてカンナ、カンナのみ咲いて
 山田に水をひく田のあをさ水のおと
 たんぽぽのくきのながさ野良にゐる
 やぎも野のくさとくれてくるころの野のはな
 手洗鉢と木と、月がこのごろ明るくなる
 川を前にここの一軒日なたの黄菊咲かせてゐる
 壁に影す 花が夜 夜
 學校が丘のコスモス咲いてゐると白い雲通る
 朝が春の早くも子供は輪廻ししてゐる
 一軒焼残つてゐるといつた風なお寺のれんぎょうも春
 池の もう寒くないさぎなみ
 春の日曇つては木蓮の白い花びらの散り

鹽田正吾

増田拵莖子

内藤吹星子

日野素木

青應香

古稀の祝。會者三十餘名。

祝古稀翁

青野原より青山なす岩木山その雪

×

鷹の會より流矢老に頭巾を呈。ついでに
 私にも茶の頭巾をくれた。私は流矢老に、
 八甲田山の雪を越えてきた私の櫛の似を削
 り、これに句を書いて、進呈。その句――
 二人は先を行くうぐひす後を行く

×

鷹の會では夜雨も、六十三になるとい
 ふ。夜雨亭を訪ひ、その大きな梅の老木が
 實をもつてゐるのを見、彼の健康を祈る――
 今年も梅の茂り實をもつころの夜の
 雨をきく
 (六月九日)

×

けふは弘前より北、五里ばかりの所にあ
 る五所川原へ行く。「弘前の會はみなお父
 サンばかりだから……」と五所川原の人は
 云ふほどに、こゝの「山河の會」の人たち
 は皆若い。「國破れて山河あり……」で、
 終戦後やうやく出来たばかり、鷹の會が四
 十年の歴史をもつのは全く違ふが、會員
 は三十名あまり。馬塞が指導して、木櫃子
 が肝煎り、石路が「山河」のがり版を作つ

竹馬のこども馬の鼻づらがたべこぼしてゐる
ぶらんこちよつとゆさぶつていつた夕燒雲
あさあさつとめのけさ女梅の一枝もちてとほる
にじくもが巢をつくらふてゐる

廣田不知火

この木今年もさくらん坊おちるほどに茂り
若草長い堤、きしよろ新しい申學生として
父の命日の山のあかい實など取つて歸り
終戦も年も終りのそらまめのたくましく生えてゐる
夏山たかく涼しく雲ながれる家々の屋根の石ころ
夏がくるといふ青空ももにふくろかぶせることをしてゐる
かげが交叉する涼しい風になつてゐるベンチ
水 平 線 海 が 廣 い 村 の 春

水野田々詩

中村秋夫

山つつお山をいろどる雨の墓に詣でてゐる
浅間はけむりのうすい日の摘草つみすてである
はつかみなりなつみかんのあついかはむく
ひとりごとつぶやきつおほ母桑の葉きざみています
たたかひは終り月がまるくなつてゐる晩
一輪挿しは一輪の白さ一日が終り

佐藤 龍

松田 勇

妻には妻の客があつて午後が花曇りといつたやうな
匂うて梅の花夜がくらくなつて咲いてゐる
火の粉、すみずみまで明るくした家、狭もつて出る
先行く女の髪は燃えてゐると見ておのれかけてゆく
空はもう白んでくる頃の燃え残つたものが燃えてゐる
燒 跡 ポ ス ト が た つ て ゐ る
うちの桃が小さい遠山は暮れどきの色濃し

印南健治

矢島寒雄

てゐる。此の夜は願昌寺といふ寺の本堂で
句會。
(六月十日)

弘前まで戻つて、乗車。鷹の會同人、驛
に見おくつてくれる。流矢が汽車中で開い
てくれと、くれたものを開くと——赤飯に
一文が添へてある——

あたゝかなうちにと椎の葉にのせ申す
流 矢

「けふは我が田の植ゑ初め祝の赤飯をた
く、これこの地の風習なり、昔は通りか
かりの旅人にも頒ち、酒をも振舞ひしも
のなりと云ふ」

秋田では、灰斗出むかへて、共に魁新聞
社へ。こゝの社員たちの爲に講演。秋田市
は戦災を免れたので、葉櫻の町筋も青々と
公園の入口に「書道展」の立札、おほりの
さざなみも長閑である。

秋田より元茶、同行して角館へ——こゝ
に半日休養して、當地同人吾亦紅、せい
人、恵洲、白鳳、魚竹等同行して、(灰斗
も後より)田澤湖へ——湖畔の觀光亭(下
總次郎方)にて句會。こゝは山菜の料理、

朝豆がなつとる子供はちいさな下駄はく
をんな眞白な着物きて山が山と山の間の日暮れ
死なずにゐた金魚がはなびらをたべたいのです
池もしづかにふる雪のみのかさで通る
これからさきのことば提灯一つでとほい星空の星
湯のわく音のしづかに月の出る山のかたち
野大根咲き續いて舟があげてある空
石山石切らない日の雨の櫻咲く
鏡のやうな海へ岩山が映つて朝
岩が岩に影して月夜
子供は二人寝せてしまつて足袋の型紙
月が明るいうちに出てわら家煙してゐる
霜解けの道が田圃へ出る裸馬にのつてゆく
長い木の橋とほい道月夜をもどり
をんどりとめんどりと靱を拾ふ遠山秋晴れ
しつとりぬれたあとの芽ぶく夜の二階の灯よ
月夜に森があつて田があつてこの道森ぬけてゆく
しづくする風があさ
どの顔もどの顔も速報板の朝日してゐる
障子明けると明るい雨の裏むいて娘針仕事してゐる
夕月も寒明けのぬくとさ薪を納屋へ入れる仕事
鳥がむぞうさに鳴いて夏の夜が明ける病人
陽炎では御一緒に参りませう
海の音霧となり松にふる
訪ねてきて縁先がよいといふ春の雲

大山多石

福本逸子

辻村追鳥子

三井不二雄

堀切春扇

東草二郎

仁平青蛾城

ふき、わらび、ぜんまい、山の芋、竹の子
みず、ぎぼうし等々、甚だ豊富。濁酒も亦
よろし。

×
初めて田澤湖に遊んだのはざつと二十年
以前だらう。その時は二三日、滞在してゐ
たやうにおぼえる。改造文庫の「井泉水句
集」には

湖はくれきりしランプをおく
といふ句もあるから、その頃はまたランプ
だつたのだ。

雲を照りいづる月は舟の中
さうだ、此句の通り、月に舟を浮べて興じ
たことであつた。吾亦紅、せい人、惠洲は
其時も一しよだつたと思ふ。

湖の月かげをかいにてかきて
誰が櫂をとつて漕いだことか、とにかく其
の清興は思ひおこされる。今夜も満月ちか
い圓い月が湖上にかゝつて、夜氣澄みきは
まつて少し寒い位、水面には、さびなみ一
つ立たぬ静かきである。(六月十三日)

×
朝、五時ごろ、獨り湖畔を散歩した。駒
ヶ嶽のひまよりさし照る曙光が湖をめぐる
山々をほのぼのと浮き上らせて、空と水と

桃の一枝をもち今日は客として行く
平田定市郎

閑古鳥この道は外人墓地へ行く道

薬びんのわきに花瓶つまらない時はだまつてある

夕映え牛はおとなしく乳しぼらしてある

梨の花や菜の花やとかくして道が夕月

晝かれてあるのが重さうな深紅の牡丹の花で

散り残りの花も散るいち日一度の時計をまく

昏れくる爐の火のひざを照らすや

ここも疎開のふるさは星がいつぱい

なにはなくとも祭の着物で木の橋渡る

月夜の祭ばやしがちと涼しすぎる病人

耳にないしよ話して春が吹きぬけてゆくことも

かつこうなけば山の一つ家豆まいてある

橋が芽ふいて雨はれて學校へ通る

木の中ともりまだ明るくて春

雨のふる海葉の散る道黒いこうもりさしてゆく

ランプへ灯して秋、夜の花にしてある

くれる山があるとすすきのほまいばん明るい月が出る

太陽霧の中にあるうちの桐のはたけ

花をなくした朴の木の勤めにゆく

夜へ歸つてきてある手袋をぬぐ

風に夕日に子供の廻す輪が廻りゆく

池の上にも池があつてさくら、幼かりし

嵐のあがつた夕方、母は木の味をつんである
若葉洩れ日の観音さんへ上る段々

石井洋音

桐井葦彦

中西國友

酒井健之

眞野たける

加賀谷灰人

水田潤

木村樟樹

が、うすやう紙のやうな青い半透明な色に
朝の感情をたたへきつて、ムヨリともしな
い。此の湖水の形のやうにいろいろたる圓
さである。

×

田澤湖は今もうつくしい。だが、昔の田
澤湖はもつと美しかった。といふのは、湖
の水がまんまんとして道のほとりまで湛へ
てゐた。發電所が出来てから水位がぐつと
落ちて、道と水との間に砂濱が出来、そこ
に芦が生えたりしてゐる、昔の田澤湖が龍
子姫の傳説をおもはせる處女の姿だとした
ら、今の湖は世帯じみたとしま女を感じさ
せる。又、山の奥にある鑛山の毒のある水
を湖水に注入させるやうに工作した爲に、
水の色が昔のやうな透明度を失つた。昔は
透明度の標準をはかるセーキ圓板が三九米
の深さではつきり見えると記され、最深處
は四二五米、全國湖沼中第一位（海底面下
一七五米）そのあたりのルリ色はフォーレ
ル水色標準液の第一號に相當し、世界に於
ても比類稀なる色を呈してゐたのである。

×

昔より國をさかひす嶺の上岩手秋田の國
をさかひす 百穂

水うつた石の昏れ残る色もほたるの通る
明るくて降り暗くなつて降り麥の穂が少し重たく
干草よく乾くお晝になる空で鳶が鳴く
風ふけばなびく一むらのえんどうであり實を持ち
月の出る橋がかけてあつてほたる
くもが巢をつくるものも、雨がふらないうちに暮れてゆく
きりのあさのなのはなみちを學校へゆくことも
たんすあけたてしてゐる鏡にある青葉
春はどこへ行かうでもない二人してこの道
燕のきてゐる藁屋の水車みづもらひました
ふるさとのおいもあなのいも
若い人達には話がいくらでもある道のさくらんぼ
新緑よい雨があがるところらいきぢの鳴いてゐる聲(朝鮮)
山から斑雪の梨畑トラック一寸故障らしく
雪の山並と焼けたビルシグが川の向うに春となる菜畑
冬海荒れてゐる海神の鳥居です
陶房のうらは水音四五本の竹が竹の秋とて
辛夷のたくましましき芽大きな雲がとほる
障子細目にして春の日ろくろ師はろくろを廻し
城、さくらの葉ちりそめてちる流れです
春は夕べの雲がさうして木には咲いてゐるのです
朝の青葉が水がめのみづ
皿に櫻んぼ、並木道が見えてゐて通り雨
風呂屋の煙が風、遠くの麥も刈つてゐる
朝は明るい雨が藁屋の二三軒先きにポスト

渡邊天仙果

梅木成敏

永田杏平

積木晃楓

高橋政二

加藤白水境

齋藤第九人

岡本流一

此の歌碑が湖畔の道端に建ててある。その前に大松が二本、歌碑を人とすれば大松の間より湖上をながめる位置である。いゝ位置である。百穂の歌は、畫人の餘技ではなくて、本格的の品格をもつてゐる。私は親しく逢つたことはなかつたが、近世畫人中の人格者だつたらしい。畫品もきはめて香氣の高いものだと思ふ。

百穂は秋田の人だが、角館には縁故がふかく、従つて百穂の作品の藏せられることも少くないとのことだ。それでは……と、私は歸途、再び角館に寄ることとした。それなら……ついでに女學校で、講演をしてほしいとも云はれて、それも時間さへあれ……と、その女學校へ、百穂の作品を持つてきてもらった。大作ではないが、晩年の作として、好い出来のものだつた。

湯澤に來た。當地の文化會のために、講演。その會後、當地のWといふお醫者さんと談が合つて、その自宅を訪ねた。床に釋宗演の一幅、これは宗演としてめづらしく力のある筆致だつた。扁額に梧竹のれい書これも悪くない。旅の楽しさは、思はぬと

お茶を賣り出ししてゐるさうなほろじろ日和
 畑のきりりでござんす味噌添えて來た
 木にハンケチの白く夜になつてゐる
 山を開く煙が日の出る
 杉が雪ふらすお宮のこま犬
 旅にて遠山の雪が見える猫柳
 あかしや散るとは匂ふバスおりて少しあるく
 月夜の星はちいさきものよくにの妻子らを思ふ
 窓は青葉もつたり暮れても青く
 お膳に草の香りも春が來てゐる
 藤を正して月の出の山のかたち
 石炭打ちあげ打ちあげ夜の明けてくる白浪
 遠くでかつことどり、朝空あさぎにはれる
 藪に星が出て日暮れても竹きる音で
 病みては顔のうへの本の匂ひ
 春は磯がよろ千いたほんだわら
 牛あふふ夕日のつや
 店の明りに虫の集る夜店を歩かう
 汽車のひびきだけの天の河原
 あけびのほろにがい和へものや祭の笛や太鼓
 一雨からりとあかつて麥のうれてだんだん鳥
 生きて歸りてふるさと柿の花こぼれてゐる
 焼跡豆のつるの伸びて花さいて今日も雨
 藤の花は空より垂れてゐる静臥椅子
 花の名などはなして居る女四五人で雨

本山越水
 平位青水
 竹内孤明
 森田和夫
 並木緑朗
 福山溪水
 杉原明雄
 吉川群孤
 中村敏喜
 栗栖ひろよし
 竹久清信
 古城白鷺
 池邊象外子

ところで、畫や書の好きものに接することに
 ある。それは楽しさばかりでなく、舊友に
 再會したやうなうれしさでもある。
 (六月十五日)

横手から吾亦紅同行して、横庄線で沼館
 へ、こゝから福地村へ一里。去年の秋にも
 歩いた道で、去年は稻刈時だつたが、今度
 は田植時だ。福地村は灰斗の家、雄物川の
 ほとり、田の中の家だが、二階から川を眺
 める景色もあり、厩には馬がいなき、爐
 の上の天井には燕がさへずり、百姓灰斗の
 家にあるとしばらくは食糧事情も忘れて、
 心ゆたかである。

×
 いつぞや、田植の手傳ひでもしようかと
 云つたジョウダンからコマが出て、けふは
 丁度、田植時なので、これも経験とジヤマ
 をさしてもらつた。代田の中にハダシでづ
 ぶりづぶりと踏込む時の感覺はうれしい。
 苗束のワラを切つて、四五本づつつまんで、
 挿してゆく、此のやはらかい手ざはりもこ
 ころよい。苗は深く挿しすぎてもいけない
 し、浅ければ浮いてしまふ。なれぬことと
 て、サツサとはかどらない。自分の足跡の
 大きな水たまりがやたらに残つてしまふ。

柿の木やはり昔そののままのおかあさん
 あるいて木いちご甘いころの風が吹く
 宵月ほんのりある菜の花でもどる
 藤の花は植田にうつりてここから山へ細くなる道
 田から田へ水の落ちてゐる田も田も植ゑ終り
 三寒四温、病んで歟の音を聞く
 山の植林の相談は二月の雨
 青葉の山へ梯子の上にある下にある聲
 山をうつす水のすみてゐるもみだねの一粒一粒
 貧しさはかけ菜の陽だまり
 すつかりあきらめてゐて透明な吸呑の液體
 今日には假線の電燈がついて町並の冬空
 荒壁へ蒔いて雑魚一杯はお元日で
 日を落してからのさざなみ雲のゆうやけ
 春しみじみと夜のすみずみの落葉
 枯芝の上に伐られた松の木日がさしてゐる
 山も日の照るうす日の花立の菊かれてゐる
 まくらもとにパン一つ晝の月一つ
 もう花のつきかけた栗でお祭にもない
 海が夜明けの雨ふる
 影が枯木の月の出たところ
 不厚白やかに祭が来て祭のぼりは空に
 麥は青し呼べば馳けてくる犬と
 咲きさうで寒梅の一鉢の番台に錢おく
 雪の田圃にほそい道が一筋瀉へ鯉買ひにゆく

鈴木單衣女

古川紅雲

鍋島次男

桑原愚村

高橋松二

佐藤吟雨

鈴木敬三

入江功一

酒井のぶえ

内藤英夫

清光寺 健

長谷川善一

吾亦紅も一緒に植ゑた。彼は、自分は校長だから、いつも生徒にやらして、カントクばかり、田の中にはいるのは今日がはじめてだとは云ふものゝ、小生よりもたしかに手際がいゝやうである。

×
 その中に灰斗は村から寫眞屋を連れてきたものだ。田の畔がせまくて、三脚がうまく立たない。森のかつこう鳥がこの珍風景を笑つてゐる。

×
 此の邊では、仕事の手を一時とめて休憩することをアガルといふ。これは田から足をぬいて上にアガルといふ意味から出たものにちがひない。田植や田草取にアガルといふのはそのまゝの氣持でいい。ところが屋根の上にある屋根屋に「もうヒルだからアガリなさい」ともいふ。屋根からはオールののだが、これもアガルといふのだから面白い。言葉といふものはさうしたものである。

×
 灰斗の家には、私の古い作品が大分にある。出して見せられると、いやどうも……と云つた風なものだ。書きかへようと豫てから云つてゐるのだが、古いのも亦いゝと